

支部見聞録

From 名古屋



開府400年 名古屋城をめぐる 物語

今年、名古屋では開府400年記念祭として、1年を通じてさまざまなイベントが行われている。徳川家康がこの地に築城を開始したのが1610（慶長15）年。なぜこの地が選ばれて城が築かれ、御三家尾張藩の拠点になったのだろうか。その陰にはさまざまな事情や思惑があった――。

天守。延べ床面積は江戸城や大坂城を上回る。最上階の窓の他はほぼオリジナル通りに再建された

「清須越し」から始まる名古屋の繁栄

「尾張名古屋は城でもつ」。名古屋にとって、金のしゃちほこを戴く城は、シンボリック的存在だ。名古屋が尾張の新しい首府として定められ、築城が始まったのがちょうど400年前。名古屋の繁栄は、築城とともに始まったのだ。それ以前の尾張の中心は名古屋の西北にある清須だった。

徳川家康が、九男義直が藩主となった尾張藩の拠点を、繁栄していた清須から空前の規模で、新しい城と町の建築を計画・移転した理由には、当時の政治情勢が大きく関わっている。名古屋城築城が決まったのは1609（慶長14）年。1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いで勝利して家康は押しも押されぬ天下人となっていたが、依然大坂城に豊臣家は存続。秀吉恩顧の武将たちが寝返る可能性もまだ大きかった。家康としては、大坂と江戸を結ぶ東海道の砦として尾張の守りを固める必要があったのだ。

最初のプランは清須城を大改築するものだったという。ところが、家臣の一人が清須は低地で水攻めに弱いからいっそ移転してはと提案。台地の縁にあって熱田の港にも近く、東西の交通も開けた那古野の地が移転先として浮上したのだ。この那古野には群雄割拠の1500

年代前半にまず今川氏親が尾張の足場として柳ノ丸という城郭を築き、その後織田信秀（信長の父）が奪って那古野城と名前を改めた。信長はこの城で清須越しして商人たちが移転してできた町、「四間道」界隈



生まれたともいわれている。やがて那古野城は信長の居城となったが、後に当時東海地方きっての町だった清須に本拠を移したため、以後那古野城は廃城となっていたのである。

他に小牧や古渡案もあったが、最終的に那古野が選ばれ、城を築き、町割（都市計画）を実施してインフラを整備したところへ清須から藩主や家臣はもちろん、町民もすべて移転するという世紀の引越しが行われることになった。神社仏閣や物資、人、町の機能まで、当時大坂や京都などに次ぐ存在だった清須の町を根こそぎ移動する大事業は「清須越し」と呼ばれ、1610（慶長15）年から築城関係者や武士、職人などが移転を開始、1613（慶長18）年ごろまでに完了したといわれる。清須から名古屋の新しい町までは約6km。今となればわずかな距離だが、当時としてはたいへんな大事業だった。町名や橋の名の中にも清須からそのまま移ったものがあった。現在も名古屋に残る伏見町や大津町、伝馬町、鍋屋町、五条橋などは清須ゆかりの名前。ちなみに、熱田から城近くまで続く堀川は、この時に町の守りと物資の流通路として掘られたもの。堀川近く、広小路の南には三ツ蔵通りという道があるが、この三ツ蔵も清須にあった名で藩の蔵が並ぶ場所だったそうだ。



開府の際拓かれた堀川

取材・撮影協力／名古屋市市民経済局文化観光部名古屋城総合事務所



江戸時代の名古屋城模型。奥に天守のある本丸、右に藩主の館がある二の丸、手前が重臣や上級武士の屋敷が並ぶ三の丸



本丸御殿模型。現物の完成は平成30年の予定



本丸御殿の復元工事は、見学することができる

◆これからの開府400年記念イベント

- 10/16～10/26 名古屋城
名古屋城本丸御殿玄関復元過程の特別公開
- 10/31 御園座
名古屋こども歌舞伎
- 11/13～11/14 中京大学文化市民会館
名古屋開府400年記念 第36回将棋の日
- 11/20～11/23 ナゴヤドーム
秋の大食楽市 ドームうまいもんワールド
- 12/12 中京大学文化市民会館
クロージング記念コンサート
- 12/17～12/25 久屋大通公園一帯
NAGOYAアカリナイト

体制安定策としての築城

さて、話を那古野から名も改めた名古屋城へと戻そう。この築城は家康にとって徳川の威光を示し、徳川幕府の支配体制を盤石にするものとしても非常に大きな意味を持っていた。最高峰の理論や技術が注ぎ込まれ、守りが堅固なのはもちろん、天守の高さは大坂城を凌ぎ、延べ床面積は4400㎡以上で江戸城に勝る。まさに日本一のビッグスケール。しかも土台を築く土木工事は、細川忠興や黒田長政、福島正則といった秀吉恩顧の外様大名に当たられた。「天下普請」といって費用はすべて大名持ち。再び豊臣方に荷担することのないよう、財産を使わせ、戦力を削ぐことも家康の狙いだった。尾張といえば信長や秀吉の出身地。大名にも尾張人は多い。そこに徳川のために身を削って巨城を築く…、内心複雑なものもあっただろうが、駆り出された大名たちは競って幕府が示した基準を遙かに超えた人員と資金を投入。1610（慶長15）年の9月末には早くもほぼ石垣が完成していたという。いちばん大切な天守台の工事は築城の名手といわれた加藤清正が一人で受け持ったが、石垣積みはわずか3カ月足らずで終えている。彼は修羅（木製の籠）に巨石を載せて陸揚げした熱田から城へと運ぶ時、美しく着飾った小姓と共に石に乗り、綱を曳く人たちははやし立て、見物の人に酒を振る舞ったと伝えられている。一方建設工事は幕府によって行われた。木材には木曾から切りだした檜がふんだんに使われたという。天守は小天守を橋台でつないだ「連結式天守」。なお、本丸の四隅の守りを固める隅櫓のうち西北隅櫓は取り壊した清須城の古材を利用したと伝えられ、清須櫓とも呼ばれている。



幸いにも歴史的価値を惜しんだ当時の駐日ドイツ公使マックス・フォン・ブラントの進言によって生き延びている。その後1891（明治24）年の濃尾地震でもびくともせず名古屋のシンボルであり続けたが、1945（昭和20）年5月14日の空襲で本丸御殿（藩主義直の居宅として建てられ、後に将軍上洛の際の宿舎となった）とともに燃え落ちてしまったのだ。名古屋城は市のシンボルであり、名古屋人の誇り。再建への願いは強く、募金も行われて1959（昭和34）年には現在の天守が完成。費用の3分の1は企業や市民の募金でまかなわれたというから、名古屋人の熱意のほどがうかがわれる。

幸い天守は戦前に国宝に指定され、実測調査で詳細に図面化されていたため、コンクリート造りとはいえ外観はほぼ忠実に復元された。同様に戦災で焼失した本丸御殿も、2009（平成21）年1月から再建工事が進められている。こちらも詳細な図面や写真類があり、忠実な復元が可能だ。しかも戦争中、万が一に備えて国宝345点を含む障壁画1049点を取り外されて保管され、焼失を免れている。これらについても忠実な模写復元を行い、かつての絢爛たる美を現代に再現する計画だ。新技術を導入しながらも当時の工法や材料を徹底追求する工事は公開で行われ、目下玄関部分の建築の様子を見学することができる。復元は開府400年を期して行われる一大事業。徐々に形を現す壮大な建築に、名古屋誕生当時の時代の息吹が今に蘇る。

400年を期して蘇る本丸御殿

今も広大な名古屋城の遺構を散策すれば、曲輪を取り巻く壮大な石垣にかつての威容がしのばれる。天守も堂々と空にそびえているが、残念ながら現在のものは戦後に建てられた鉄筋コンクリート製。明治維新の時まで残っていた日本の城のほとんどは明治政府の廃城令によって取り壊されたが、名古屋城はこの時には

金鯱は名古屋城の象徴。これは本丸御殿の復元祈願のために作られた模造の金鯱で、正門を入れてすぐの場所に飾られている



別冊 FROMはウェブサイトへ
 ●eふあみり もあわせてご覧ください!
<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>